

「保健だより」に関する一考察
—雑誌『健康教室』に掲載された保健だよりの機能の推移と
1987・2010年の製作実態に関する比較—

佐藤 佳代子 小浜 明

キーワード：保健だより 歴史的変遷 製作過程
雑誌『健康教室』 アンケート調査

A study of “Health News” by *Yogo* teacher
—History of which roles “Health News” in *Kenko Kyoshitsu* has
taken and comparison of “Health News” production process
between 1987 and 2010—

Kayko Sato Akira Kohama

Abstract

This study had two purposes. The first was to study “Health News” carried in “*Kenko Kyoshitsu*” from 1928 to 2009 and analyzed the change of their roles in a field of a primary, secondary, and special needs school education. The second was to compare the research results of the production process of “Health News” in 1987 with those of 2010 and analyze the change of their production process.

This study adapts two methods. The first was to group articles of “Health News” from 1928 to 2009 based on Fujita’s method. The second was to investigate the production process of “Health News”, referring to Nanba’s research. The subject were *Yogo* Teacher (Nursing teacher) in Miyagi prefecture(102 *Yogo* Teachers at elementary schools, 102 lower secondary school, 80 upper secondary schools, 16 special needs schools), to whom questionnaires were mailed. This study reveals that topics of “Health News” change according to social changes surrounding children. Considering such a contradictory tendency as to select Readers and to mechanically deliver the “news” to children, it must be necessary to try some invention to make “Health News” timely, interesting and meaningful.

Key words : “Health News”, history of “Health News”, production process
“*Kenko Kyoshitsu*”, questionnaires

目次

I. はじめに
II. 保健だよりの機能の整理
III. 研究方法
1. 「健康教室」における「保健だより」の歴史的変遷
2. アンケート調査の比較による「保健だより」の実態
IV. 「保健だより」の歴史的変遷
1. 「保健だより」掲載件数の変遷概要
2. 「保健だより」の機能分類の変遷
3. 機能の変遷についての考察
4. 「保健だより」の歴史的変遷のまとめ
V. 2010年佐藤と1987年難波の調査結果の比較
1. 2010年佐藤の調査の概要
2. 2010年佐藤の調査の結果と考察
3. 2010年と1987年調査の比較からの考察
VI. まとめ
VII. 今後の課題
参考文献

I. はじめに

「保健だより」とは、養護教諭の教育実践の一つである。従来から多くの養護教諭が「保健だより」を保健指導等の手段の一つとして発行してきた。法的に定められていない、作成方法に様式はないが多くの養護教諭が保健だよりを養護教諭の実践の一つとして行っている。

友定¹⁾によると、戦後の学校教育は、保護者・地域との協力のもとで行われることになり、その交流手段として「たより」に類するものが盛んに出され、1950年頃からは保護者に向けた家庭通信が出されるようになったという。しかし、保健だよりの歴史的な分析はされておらず、いつから、どのような目的で発行され、どのように変遷しているかも明らかにされていない。養護教諭が歴史を学ぶ意味を宍戸(2000)は、「養護教諭としては今、この時代に何を大切に仕事をするべきか、私たちのこれからの仕事づくりを考えると、今一度歴史を振り返り、原点に立ち戻って考えてみる必要がある²⁾」と述べている。つまり、「保健だより」の歴史を振り返ることは、これからの保健だよりを製作するにあたって重要な視点をつくることになる。

また、難波ら(1987)が北海道・宮城・埼玉・東京・静岡・大阪・福岡の小学校、中学校、高等学校を対象に行った『保健だよりに関する実態調査』によると、学校種毎に頻度に差はあるが、9割を超える養護教諭が保健だよりを発行しているということがわかっている³⁾。この調査により、保健だよりの製作状況は小学校と中学校・高校の間では大きく異なることが明らかになっている。ただし、1987年以降で保健だよりについての調査は行われていないため、現在の保健だよりの実態は明らかになっていない。

以上をふまえ、本研究の目的は以下の二つである。

1) 創刊(1928)から2009年までに「健康教室」に掲載された「保健だより」を藤田の機能分類によって分析し、変遷過程をまとめる。

2) 1987年に難波らが行った調査と比較することによって、現在の保健だより製作の実態がどのように変化したかを分析する。

これらを分析することで、保健だより製作について考える上で示唆が得られればと考える。

II. 保健だよりの機能の整理

保健だよりが、いつごろ、どのような目的で発行されはじめたのかを明確に示した先行研究は見当たらない。ただし、保健だよりの意味や機能について述べられている文献はいくつかある。しかし、著者により保健だよりのとらえ方が異なっている。今回、出井、友定、藤田を取り上げ、保健だよりのとらえ方について整理する。表1は出井、友定、藤田の保健だよりの機能分類を表したものである。

表1 保健だよりの機能分類の整理

出井(2009)	友定(1989)	藤田(2008)
管理的側面	コミュニケーション手段	広報 実践の記録 子どもの様子を伝える 啓蒙・保健指導 意識の啓発 交流の場 資料・教材
教育的側面	保健指導	

1) 出井の保健だよりについての考え方

出井⁴⁾は保健だよりを「子どもの健康に関わる事柄についての情報発信」とであると述べている。保健だよりを発行することで、子どもたちの健康状態や現在問題になっているこ

となどを知ってもらうことによって連携を進めるための基礎になるという考えである。保健だよりの主たる目的は、学校と児童生徒、生徒と家庭、学校と家庭のかけ橋として活用されている。出井は保健だよりのねらいを大別し、管理的側面と教育的側面に分類している。管理的側面とは、学校における保健行事を知らせる、児童生徒および児童生徒を取り巻く地域の健康実態を知らせる、保健室経営の一環として活用する、保護者および児童生徒の連携を図る、である。教育的側面とは、児童生徒の健康の情報の伝達、保健教育の実施状況や内容を知らせ家庭との共通理解を図る、健康に関心を持たせる、である。

2) 友定の保健だよりについての考え方

友定は、保健だよりの伝統的な役割が「保健知識や関心を高めるための手段にある」¹⁾と述べている。保健だよりは養護教諭の保健指導における「代表的資料媒体」とする考えである。また、保健だよりは保健指導を円滑にしていくための媒体でもあり、人的ネットワークを形成するコミュニケーション手段として活用していくべきであるということを描いている。ただし、保健だよりは「送り手」と「受け手」をつなぐ媒体の一つであるため「送り手」である養護教諭の発想が「受け手」の反応を左右すると友定は述べている。

3) 藤田の保健だよりについての考え方

藤田²⁾は、保健だよりを養護教諭の「通信実践」であると述べている。保健だよりは養護教諭の実践を進める上で欠かせない「通信手段・情報伝達媒体」とする考えである。養護教諭の子どもたちとのコミュニケーションは学級担任と異なり、特別の場の設定等の何らかの媒体が必要となるためである。藤田は保健だよりの機能を七つに分類している。保健だよりの機能は①広報機能、②啓蒙・保健指導機能、③意識の啓発機能、④指導資料・教材としての機能、⑤子どもの様子を伝えるたよりとしての機能、⑥交流の場としての機能、⑦実践の記録としての機能、と述べている。広報機能は、行事の知らせなど、事務的・公的に知らせるべき情報を伝え、健康診断結果や取り組みの結果などを広く知らせるものである。啓蒙・保健指導機能は、保護者や子どもたちに健康知識を伝達するものである。意識の啓発機能は、読み手の問題意識を促したり、関心を高めたりするものである。指導

資料・教材としての機能は、学級担任の学級保健指導の際の指導資料や教材として利用できるような内容を盛り込んだ保健だよりを教師向けに発行するものである。子どもの様子を伝えるたよりとしての機能は、保健室でとらえた子どもの様子を載せるものである。交流の場としての機能は、保健だよりを発行する側の一方的な情報伝達の媒体にせず、相互交通のある通信にするものである。実践の記録の機能とは、養護教諭の取り組みを載せることで、自分の実践を振り返り、省察・総括する重要な活用方法である。

出井、友定、藤田に共通することは、「保健だより」は健康情報の発信とコミュニケーションの手段となっているということである。出井は「かけ橋」、友定は「人的ネットワークを形成する」、藤田は「相互交通のある通信にする」と述べていることから、「保健だより」は情報を伝えるとともに、学校、子ども、家庭をつなぐ役割を果たしていくべきものであるということがいえる。つまり、情報発信とコミュニケーションの媒体であることは保健だよりに必要な要件なのである。ただし、藤田の指導資料・教材、実践の記録という分類は他の著者には見られないため、藤田特有の考え方であるといえる。

III. 研究方法

1. 「健康教室」における「保健だより」の歴史の変遷

雑誌「健康教室」を創刊の1928年から2009年まで掲載された「保健だより」分析対象とした。しかし、保健だよりの始まりと考えられる記事が掲載されたのは1957年77集である。そのため、分析は1957年から掲載された「保健だより」とする。分類は、藤田の機能分類にしたがった。藤田の分類とした理由は、先行研究から、藤田が特有の分類をしており、より詳細な分類をしているためである。また、分類にあたっては一つの保健だよりに載せられた機能を1として集計している。そのため、一つの保健だよりの中に複数の機能がある場合も1と数えられることになる。分類の詳細は表2に示した。

表2 藤田を参考にした機能分類

保健だよりの機能分類	内容
広報機能	行事のお知らせなど、事務的・公的に知らせるべき情報を伝えたり、健康診断の取り組みの結果などを広く知らせたりする機能。
啓蒙・保健指導機能	保護者や子どもたちに健康知識を伝達する機能。からだの仕組みと働きや生活の巧みさを伝えたり、身近な病気の発生のメカニズムや予防の方法を分かりやすく説明したり、健康行動の根拠となるような保健の科学の世界を開くような話が盛り込まれる。
意識の啓発機能	読み手の問題意識を促したり、関心を高めたりして、意識の啓発を主要なねらいとしている。主に職場の教職員向けや保護者向けの保健だよりで意識されている。教職員向けでは、子どもたちの健康や生活の実態、性に関する関心や行動上の問題を投げかけ、取り組みの必要性に対する認識を高める。保護者向けには子どもたちの生活づくりの必要性を訴えたり、学校の取り組みに理解や協力を求めたりする。
指導資料・教材として	教師向けに学級担任の学級保健指導の際の指導資料や教材として活用できるような内容を盛り込んだ保健だより。
子どもの様子を伝える	保健室でとらえた子どもの様子を載せる。
交流の場として	保護者や学級担任、ときには子どもたちの声を載せて、感想や意見あるいは子育ての知恵などを交換する場にする。相互通信のある通信。
実践の記録として	養護教諭自身の実践の一端を載せたり、職場の教師たちとの取り組みの様子を載せて、職場や保護者向けに出す。
その他	給食の献立など藤田の分類に当てはまらないもの。

2. アンケート調査の比較による「保健だより」の実態

難波らの行ったアンケートを参考に、保健だよりの製作過程についての調査を行った。対象は、宮城県に勤務する養護教諭とし、宮城県内の学校からランダムに抽出した。郵送によるアンケートを小学校 102 校、中学校 102 校、高等学校 80 校、特別支援学校 16 校を対象に実施した。期間は 2010 年 5 月 10 日から 5 月 31 日とし、内容は養護教諭自身と学校の実態について、保健だよりの発行と製作過程についての回答を求めた。2010 年の調査で回収した質問紙は、179 枚で、回収率は 59.7%であった。各学校種の回収は小学校 65(63.7%)、中学校 58(56.9%)、高等学校 42(87.5%)、特別支援学校 14(87.5%)である。アンケートの結果は学校種と 1987 年と 2010 年を比較するために統計分析を行った。ソフトは“JavaScript-STAR”を使用し、検定方法は χ^2 検定を用いた⁶⁾。

IV. 「健康教室」における歴史的変遷

1. 「保健だより」掲載件数の変遷の概要

掲載は 1957 年から始まる。1967 年までは掲載がない年もあるが、それ以降は件数に増減があるが毎年掲載されている。掲載件数は 1979 年から増減しながら徐々に増加傾向になり、1987 年と 1990 年は最も多くなる。また、1990 年以降は再び増減しながら減少傾向になり、2009 年には 1983 年の掲載件数に近い状況となる。

2. 「保健だより」の機能分類の変遷

図 1 に保健だよりの機能の変遷を示した。1978 年から啓蒙・保健指導機能が多くなっていく傾向がある。1985 年は意識の啓発が最も多い。また、保健だよりの機能は 1957 年から 2009 年の間で広報機能、啓蒙・保健指導機能、意識の啓発機能が主な機能となっていることがわかる。

1957 年から 1962 年における保健だよりは啓蒙・保健指導機能と広報機能が多い。内容としては、広報機能は健康診断等の保健行事の知らせ、啓蒙・保健指導機能では感染症を予防する呼びかけが中心である。1963 年から 1970 年までは保健行事を知らせる記事よりも啓蒙・保健指導機能の記事を中心とした保健だよりが掲載されている。1957 年から 1962 年の啓蒙・保健指導機能と比べると、呼びかけだけでなく具体的指導を伴ったものが多い。1963 年から 1975 年半ばまではイラストが多く盛り込まれた保健だよりが多くなる。1975 年から 1978 年半ばは、さらに啓蒙・保健指導機能の内容を含んだ保健だよりが多くなり、1978 年半ば以降からは啓蒙・保健指導機能では健康知識の内容の質が高まり、指導の根拠となる情報が載せられるようになっていく。虫歯予防の知識の一環として清涼飲料

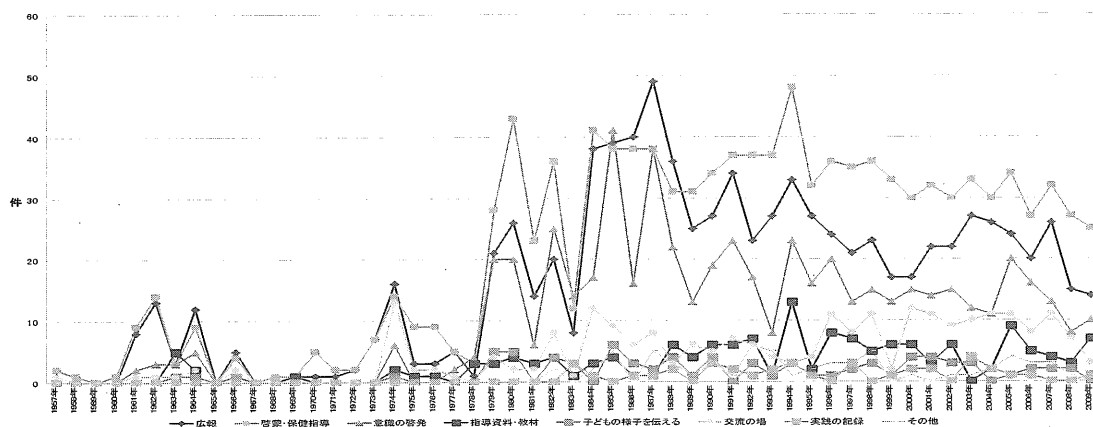


図1 「健康教室」における保健だよりの機能の変遷

水の飲み方や砂糖含有量、近視予防の知識を深める眼球の構造等の情報である。1980年からは子どもの実態に関するグラフを含んだ保健だよりが増えてきた。1980年からも虫歯予防や近視予防の啓蒙・保健指導機能の掲載は多いが、この他に姿勢の指導に関する記事も載せられるようになってきている。1982年からはアンケートによる子どもの生活習慣等の実態調査の報告が載せられるようになってきた。また、たばこに関する知識や指導が載せられ始めた。1990年代からは、性教育に関する指導や薬の正しい服用についての指導が載せられ始めた。2000年代は性教育に関する指導やたばこの指導、生活習慣病予防に関する指導、薬物乱用防止に関する指導、受験期の健康管理に関する指導が載せられている。

3. 機能の変遷についての考察

図1から、急激な変化のあった四点について考察した。

1) 1950年代

折橋(1991)によると、1958年4月に学校保健法が、1959年に学校安全法が制定された頃に「保健だより」を発行し、毎月保健行事等々児童を通じ家庭への保健指導、健康管理の啓蒙をはかったという⁷⁾。また、吉村(1991)も1958年秋から健康情報を伝える方法として発行しはじめたといっている。折橋と吉村に共通することは学校保健法制定をきっかけに保健だよりを発行しはじめたということである⁸⁾。法律が制定されたことにより、学校保健研究が各地区で活発に活動しはじめたことや養護教諭の職務内容に専門的役割が位置付けられたことが影響しているのではないかと考えられる。

2) 1970年代

1970年代前半の保健だよりの特徴は、大半が啓蒙・保健指導の機能のものが多くことである。内容は、「手洗いをしよう」という図2のような呼びかけるものが多く、なぜそのようなしなくてはいけないのか等の根拠となる情報や具体的な指導が書かれていない場合が多い。また、風邪の予防や手洗いの方法、バランスよく栄養をとるなど、身体の健康の保持増進が中心となっている。1970年代後半は図3のような具体的な指導の方法を示した保健だよりが多く見られるようになる。1970年代はいすに座ってられない、朝からあくび、姿勢が悪い、転びやすい、転ぶと骨折す

る、アトピー疾患の増加、歯並びの良くない子の増加が問題となっていた⁹⁾。これらのことから、1970年代は保健情報の呼びかけが特に重要であったことがうかがえる。

ねびえをふせごう

- 夜になると、ぐんとすずしくなり、夜中にはずいぶんひえます。
- おなかを出しておないように。



図2 佐賀明代(1974)健康教室, 286 : p 56

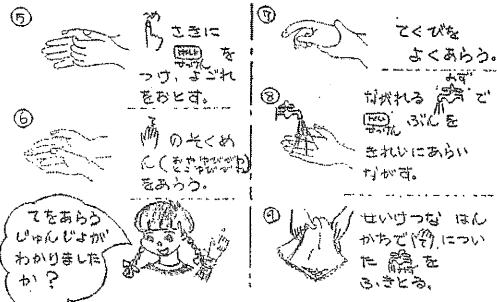


図3 中西三千代(1979)健康教室, 342 : p 76

3) 1980年代について

1980年代の保健だよりの特徴は、図4のような子どもたちへの生活等についてのアンケートの結果や、保健室利用者数、風邪の罹患率等を統計的にあらわしたものが多くなる。統計の結果等から、子どもたちの問題や、問題意識を促すようなものが多く掲載されていた。子どもの実態から得られたことから、子どもの生活の立て直しをしていこうとしたのではないかと考えられる。また、養護教諭が変化する子どもの実態をとらえ、子ども、保護者、教師の間で情報を共有しようとする動きの表れとも考えられる。

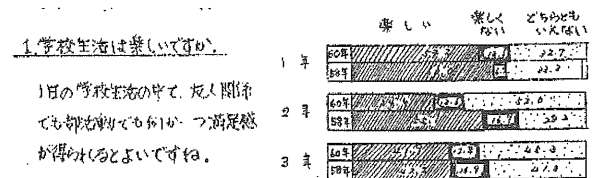


図4 下平久江(1989)健康教室, 461 : p 94

4) 1990年代

1990年代の保健だよりの特徴は、健康知識の伝達だけでなく、子どもたちが考えるような発問などの文章の工夫がされている。「カゼをひいてもすぐに風邪薬を飲まないのはなぜだろう？」などといった、読み手の思考を揺さぶった上で指導に入るものが多い。また、

ダイエットや朝食欠食，心の健康問題，性感染症などの健康課題への問題意識の促しと対応について掲載されている。保健の教材作り運動の影響を受け，行動だけでなく，知識を踏まえて自分で考えて行動していくことがいわれていたことが背景にあると考えられる。

4. 「保健だより」の歴史的変遷のまとめ

考察を踏まえると，保健だよりが出されはじめるようになったのは，1958年前後であったということが推測される。はじめは保健指導，保健管理，健康情報を伝える方法として発行されていた。

1970年代は1979年から保健だよりの掲載件数が多くなり，啓蒙・保健指導機能が高い割合である。1970年代前半と後半では啓蒙・保健指導機能の質が変化し，呼びかけるような内容から具体的指導を伴ったものとなっている。不健康な子どもの増加が背景にあると考えられる。

1980年代では，1987年に広報機能の割合が最も高くなる。子どもたちの保健室利用状況や子どもの生活に関するアンケートの結果を載せた保健だよりが多い。また，1980年代は心の健康，喫煙，飲酒，薬の服用方法なども載せられはじめる。子どもの実態から，養護教諭が変化する子どもたちへ対応しようとしたあらわれではないかと考えられる。

1990年代では，1994年に啓蒙・保健指導機能の割合が最も高く，意識の啓発機能も高い割合である。ダイエットや朝食欠食，心の健康問題，性感染症などが載せられはじめる。この時代の背景としては，保健の教材づくり運動の影響を受けて子どもに知識をもとに自ら考えるための意識を啓発していく必要があったと考えられる。

以上のことから，「健康教室」における保健だよりのはじまりとトレンドとなっている機能の移り変わりが明らかになった。保健だよりは法律や社会，子どもの実態によって機能が変化しているということがわかる。そのため，保健だよりは送り手が読み手に対してその時代に必要な情報を伝えるたよりとなっているということがいえる。

V. 2010年佐藤と1987年難波の調査結果の比較

1. 2010年佐藤の調査の概要

回答者は40歳代，50歳代を合わせ，115

(64.2%)となることから，養護教諭としての経験も含め，人生経験豊富な養護教諭の回答を得られたことが予想される。また，回答者のうち130(72.7%)が経験年数10年を越すベテラン養護教諭である。学校の地域性は，小学校，中学校，高等学校では農業地域にある割合が高いが，特別支援学校においては住宅地域にある割合が高い。

2. 2010年佐藤の調査結果と考察

保健だよりの製作者は，ほとんどが養護教諭であることがわかった。発行回数はどの学校種も月1回が多いが(小学校77.8%，中学校80.7%，高等学校80.5%)，月2～3回は学校種が低いほど高い割合(小学校22.2%，中学校19.3%，高等学校15.0%)であること，製作時間は学校種が低いほど一週間未満の割合が高い(小学校93.8%，中学校89.3%，高等学校70.7%)ことから，製作時間は発行回数の影響を受けていることが示唆される。読対象の中心は全体ではどの学校種でも一人が多いが，学校種ごとに比較すると高等学校で対象を一人とする割合が特に高い(71.4%)。発行の種類はどの学校種も一種類の発行が高い割合であり(小学校92.3%，中学校94.8%，高等学校92.9%)，複数の対象に対して同じ内容の保健だよりを提供している可能性があるということが推測される。活用方法は学校種が上がるにつれ配るだけが多くなる(小学校53.6%，中学校60.9%，高等学校91.2%)。保健だよりの名称は学校種が低いほど独自の名称で発行している割合が高い(小学校60.0%，中学校72.9%，高等学校76.2%)。製作上の苦心はどの学校種も内容が高い割合である(小学校87.0%，中学校96.0%，高等学校83.3%)。参考にする物は全体で見ると養護教諭関連雑誌(健康教室，健)の割合が高い(小学校58.1%，中学校67.6%，高等学校63.6%)。

3. 2010年と1987年調査の比較からの考察 結果の比較を表3に示した。

1) プラスの変化

発行回数は1987年では中学校と高等学校で月2～3回の割合が0%であったことに対して，2010年では月に複数回発行する学校があらわれた。印刷技術の進歩も保健だよりの発行を助けていると推測される。また，保健だよりの名称については小学校，中学校において独自性が増してきている。

表3 1987年と2010年の調査結果の比較

			小学校		中学校		高等学校		特別支援学校		有意差	
			n	%	n	%	n	%	n	%		
発行回数	1987年	月1回	171	87.7%	120	100.0%	53	100.0%			/	
		月2～3回	24	12.3%	0	0.0%	0	0.0%				
	2010年	月1回	49	77.8%	46	80.7%	34	85.0%	13	92.9%		
		月2～3回	14	22.2%	11	19.3%	6	15.0%	1	7.1%		
種類	1987年	一種類	185	93.9%	140	96.6%	60	96.7%			/	
		二種類以上	12	6.1%	5	3.4%	2	3.3%				
	2010年	一種類	60	92.3%	55	94.8%	39	92.9%	11	78.6%		n.s.
		二種類以上	5	7.7%	3	5.2%	3	7.1%	3	21.4%		
読む対象の中心	1987年	一人	37	22.2%	73	51.8%	38	63.3%			/	
		複数	129	77.8%	68	48.2%	22	36.6%				
	2010年	一人	36	55.4%	32	55.2%	30	71.4%	6	42.9%		小学校
		複数	29	44.6%	26	44.8%	12	28.6%	8	57.1%		**
活用方法	1987年	配るだけ	70	35.0%	75	52.8%	47	78.3%			/	
		学級担任	130	65.0%	67	47.2%	13	21.7%				
	2010年	配るだけ	30	53.6%	28	60.9%	31	91.2%	5	50.0%		高等学校
		学級担任	26	46.4%	18	39.1%	3	8.8%	5	50.0%		**
名称	1987年	保健だより	185	90.7%	132	90.4%	54	85.7%			/	
		その他	19	9.3%	14	9.6%	9	14.3%				
	2010年	保健だより	39	60.0%	41	71.9%	32	76.2%	9	64.3%		中学校
		その他	26	40.0%	16	28.1%	10	23.8%	5	35.7%		**
製作上の苦心	1987年	内容	149	85.7%	116	89.2%	50	87.8%			/	
		外観	25	14.3%	14	10.8%	7	12.3%				
	2010年	内容	47	87.0%	48	96.0%	30	83.3%	8	80.0%		n.s.
		外観	7	13.0%	2	4.0%	6	16.7%	2	20.0%		
参考にする物	1987年	養護教諭関連雑誌	85	41.7%	89	60.9%	40	63.5%			/	
		その他	119	58.3%	57	39.1%	23	36.5%				
	2010年	養護教諭関連雑誌	25	58.1%	25	67.6%	14	63.6%	7	77.8%		小学校
		その他	18	41.9%	12	32.4%	8	36.4%	2	22.2%		*
製作時間	1987年	1週間未満	160	82.9%	110	76.9%	36	58.1%			/	
		1週間以上	33	17.1%	33	23.1%	26	41.9%				
	2010年	1週間未満	60	93.8%	50	89.3%	29	70.7%	12	85.7%		中学校
		1週間以上	4	6.2%	6	10.7%	12	29.3%	2	14.3%		*
製作者	1987年	養護教諭	197	96.6%	113	77.4%	32	50.8%			/	
		養護教諭以外	7	3.4%	33	22.6%	31	49.2%				
	2010年	養護教諭	65	100.0%	54	96.4%	34	81.0%	14	100.0%		
		養護教諭以外	0	0.0%	2	3.6%	8	19.0%	0	0.0%		

有意差なし:n.s. p<0.05:* p<0.01:**

2) マイナスの変化

2010年では製作者が一人である割合が高い。1987年において「保健だより」は児童・生徒等の複数の製作者が関わり、製作されていた。2010年では養護教諭一人が製作している割合が高く、「送り手」が統一されることが多くなったという変化がある。

活用方法は1987年と比べ、2010年では高等学校で配るだけになることが多くなっている。指導されず配られることが多くなっているため、今日の「保健だより」の活用方法は「受け手」である児童・生徒、保護者、教師に委ねられているということがいえる。高等学校で外観に苦心する割合が高いことは、読まれる工夫をしているためではないかと考えられる。

3) 変化なし

読む対象の中心は、1987年も2010年も学校種が上がるにつれ児童・生徒が対象となるという傾向は変わっていない。

VI. まとめ

1. 「健康教室」における歴史的変遷のまとめ
今回の調査から、「保健だより」の歴史的な

トレンドをみると、道徳・徳目的指導から、アンケートなどの子どもの実態を知らせるものへ、発問などの工夫によって読み手が考えることによって知識を得るものへと変化しているということがいえる。

①「保健だより」のはじまり

盛んに発行され始めたきっかけは、1958年の学校保健法、1959年の学校安全法が制定されたことが大きな影響を与えている。学校保健研究が各地区で活発に活動しはじめたことや養護教諭の職務内容に専門的役割が位置付けられたことが影響している。

②1970年代

前半と後半では啓蒙・保健指導機能の内容の質が変化し、後半では呼びかけるだけでなく、具体的指導が伴ったものとなる。背景には子どもの体が蝕まれているなど不健康な子どもの増加がある。

③1980年代

生徒の実態をアンケート結果などの統計とともに載せたたよりが多く出されはじめる。養護教諭が不健康な子どもの生活習慣等の実態を捉え、実態から指導を考えはじめた。

④1990年代

健康知識の伝達だけでなく、健康課題への問題意識を持たせる内容が載せられはじめる。背景には保健の教材作り運動の影響がある。

2. アンケート調査についてのまとめ

アンケートの比較から発行回数が増えるなど、製作しやすくなった分、テーマの選定など内容に苦心する傾向がみられた。

①プラスの変化

1987年と2010年とでは中学校と高等学校で発行回数が増加した。「保健だより」の名称については小学校、中学校において独自の名称で製作するなど独自性が増してきている。

②マイナスの変化

1987年と比べ2010年では養護教諭一人が製作している割合が高く、「送り手」が統一されることが多くなった。活用方法は1987年と比べ、2010年では高等学校で配るだけになることが多くなっている。

③変化なし

読む対象の中心は、1987年も2010年も学校種が上がるにつれ児童・生徒が対象となるという傾向は変わっていない。

VII. 今後の課題

本研究では、保健だよりの歴史的変遷と保健だよりの製作過程について一考察することができた。

調査結果から「保健だより」の内容は、社会の影響や子どもの実態を受け、時代に合った記事や機能で書かれ、変化していることがわかった。また、読む対象を複数とすることが少なくなり、配るだけとなることが多くなったことも踏まえると、より読み手を意識し、読み手にとってタイムリーで興味関心のある内容を心掛け、読まれる工夫をしていかなければならないということが示唆された。

しかし、本研究では「保健だより」の機能に着目し歴史的変遷を見ることができたが、内容の質を検討することはできていない。また、アンケート調査では養護教諭のみが対象であり、子どもについては調査できていない。そのため、保健だよりの内容を充実させる取り組みについて調査していく必要がある。

今後は、内容を豊かにする取り組みと、子どもの健康を保障する保健だよりとは何か調べていくことを課題としたい。

参考文献

- 1)友定保博(1989)「保健だよりを考える」「見える建設」と「見えない建設」. 健康教室, 486 : p 44 - 51
- 2)宍戸洲美(2000)養護教諭の役割と教育実践. 学事出版 : 東京, 26
- 3)難波英子, 中桐佐智子, 津島ひろ江, 松岡弘(1987)保健だよりに関する実態調査. 学校保健研究, Vol.29, No.11, p 543 - 546
- 4)出井美智子(2009)「ほけんだより」のつくり方ガイドブック—理論と実際—. 株式会社少年写真新聞社 : 東京, p 10 - 14
- 5)藤田和也(2008)養護教諭が担う教育とは何か. 農村漁村文化協会 : 東京, p 174-190
- 6)小浜明, 宮本友弘(2006). スポーツ・健康データの有意差検定と活用. 学事出版 : 東京, p 92-96
- 7) 養護教諭制度 50 周年記念誌編集委員会 (1991)養護教諭制度 50 周年記念誌. ぎょうせい : 東京, p 73
- 8) 前掲 7) p 93